

午前中の二つの講義後に、午後は全国からの研修会参加者 76 名が、班別協議として 8 班にわかれ交通安全指導に関する活発な協議を行った。8 班の班名は以下の通り。

（幼児班が 3 つ・児童班が 3 つ・高齢者班が 1 つ・広報班が 1 つ）

OSCN の私（片山）は児童班①で、若杉氏は③で、それぞれ班での協議内容の報告者として班別協議後の全体協議の場で、協議内容の発表を行った。

## ① 児童班① 参加者 10 名

北海道士別市	市民部くらし安全課職員
福島県福島市	生活課 交通安全教育専門員
千葉県旭市	市民生活課 副主査
福岡県北九州市	北九州交通公園職員
長野県長野市	地域活動支援課 長野市交通安全教育講師
宮城県岩沼市	総務部危機管理課 主事
山形県酒田市	まちづくり推進課 交通安全専門指導員
千葉県浦安市	市民安全課 安全指導員
埼玉県越谷市	くらし安全課職員
長野県上田市	交通安全教育 OSCN 研究所／中塩田小学校

## ② 「班別および全体会の協議で出された意見」

※片山のメモ書きより

### 【交通安全教育 全般について】

- ・コロナ前後で、指導形態が変化し、体験型が少なくなり、ビデオ等での一括指導が多くなった
- ・1年生では、公道に出かけて安全な歩行者訓練を、3年生以降は、校庭や体育館にコースを設定し自転車の交通法規走行訓練などを行っている地域が多い
- ・全学年対象の交通安全指導講話では、話し言葉を1年生が理解できるように話さないといけない
- ・交通安全教育では、学校の教員・市の職員・警察や安協の職員・地域の支援者との協働が最重要課題であり、郊外での実地指導などでは、指導者の人員確保に困難を感じている自治体も多い
- ・発達段階に応じた具体的な内容の交通安全教育を設定する必要がある
- ・保護者自身が、自転車も含めた交通安全についてのルールや大切な点に関する認識や理解を深める必要がある。児童や生徒のみに指導していても、家庭が理解していないと成果が上がらない。

## 【自転車の交通安全教育について】

- ・自転車の運転免許証を発行し、小学校3年生までは、公道での乗車を禁止する地域や、保護者同伴でなければ不可の地域などもある
- ・自転車の交通安全教育は、技術的に上手に乗れるようになるのを目指すのではなく、交通ルールを理解し安全に乗れるようになることを第一義とすべきだ
- ・自転車の乗車を伴う指導では、使用する自転車の調達が難しい自治体や学校が多く、近年自転車にまだ乗れない小学生中学年以上も多いことから、OSCNで開発の「模擬ハンドル」による指導も効果的との意見が多く出された
- ・自転車のヘルメット着用の重要性を指導するには、正しいかぶり方の分かりやすい説明と共に、児童や保護者に「なぜ重要なのか」を理解させるような具体的な指導方法が望まれる。  
例：ヘルメット内に卵や水風船を入れた落下実験など
- ・保護者自身が、自転車も含めた交通安全についてのルールや大切な点に関する認識や理解を深める必要がある。児童や生徒のみに指導していても、家庭が理解していないと成果が上がらない。
- ・大人が率先してヘルメットを着用し、児童生徒にお手本を示す取り組みが大切
- ・命の尊さを理解させてヘルメットをかぶらせるよう指導が大切
- ・自転車の運転に関して、横断歩道では、道路交通法上は押し歩きの必要が無くても、小中学生の児童生徒には、青信号でも、信号が無い横断歩道でも、一度手前で自転車から降りて落ちて安全確認後、押して渡るといった指導をしている地域も少なからず存在している  
自転車から降りて押して渡った方が、的確な安全確認につながる

## ③ 「R6年度 研修会を終えて 片山所感」

片山は、当研修会に参加して11年目となった。

この間の印象としては、日本全国で絶え間なく交通安全教育の現場指導に取り組んで来られた方々の指導力や授業構成力、研究内容が深まり、向上してきたのを感じている。

しかし、未だ、児童に日々直接かかわる家庭の保護者や学校教育現場の先生方との間での、交通安全教育の重要性への認識のずれを感じることが多い。

大学等の研究者による貴重な知見が様々な教育現場で活かされ、

子どもたちに日々伝わるような指導体制づくりが今さらながらに必要とされていると感じる。